

たなか踏基 著
▶ 陶匠の血脈

11・10刊 四六判288頁 本体1600円
幻冬舎ルネッサンス

九谷焼の陶工たちが心血を注いで 作品を生み出す様の描写は、秀麗にして圧巻

日露戦争やロシア革命を背景とした、3代にわたる陶匠の物語

村木 哲



九谷焼の陶工を主人公にして
て大きな歴史事象(日露戦争、
ロシア革命)を交錯させた意
欲的な作品である。物語の始
まりは、山代温泉にある窯元
であり、時代は明治期から大

正期へと涉っていく。新興の
秦山窯の主・秦甚兵衛と山代
温泉の芸妓・月遊の間に生ま
れた秦久左衛門は、もって生
まれた嗅覚の才があり、陶土

を見分けることができた。久
左衛門は、九谷焼の名匠・菊
田屋窯初代本多菊三郎に見込
まれて、菊田屋窯の陶工とし
て修業することになる。代が
変わり二代目菊三郎は、初代

に劣らない名匠として菊田屋
窯を統率していた。二代目菊
三郎には本妻との間に長女・
妙がいた。東京には年若い愛

妾・半井美代がいて、一男一
女をもうけていた。妙は一度
他家に嫁いでいたが、姑との
折り合いが悪く離縁されて戻

っていた。外聞を気にして、
「母屋を離れて陶工職人が寄
宿する棟続きの寄宿舎に住み
込み同然で炊事洗濯の世話を
し」ていたが、やがて、「妙
は一番年少の弟子で十七歳に
なったばかりの丸顔の久左衛
門に惹かれ」ていった。そし
て、二人の間に子供が生まれ
るといふ関係性にまでなっ
ていくのだが、一緒に所帯を持
つことは許されなかった。子

供は宗次郎と名付けられ美代
に託され、実父母を知らない
まま、流亡の果てに九谷焼の
陶工として自存していったと
ころで、物語は閉じられてい

く。
「陶匠の血脈」とは、まさ
しく二代目菊三郎(長女・妙)
―秦久左衛門・半井宗次郎と
いう系譜を象徴することにな

る。
わたしは、この「陶匠の血
脈」の背後に横たわる歴史事
象よりも、陶工(陶匠)たち
が、心血注ぐように作品を生

み出す様に感心する。例えば、
妙との仲を引き離され、菊田
屋窯を去ることになり、新た
な作陶の場所で仕事に没頭す

る久左衛門の描写は、圧巻だ。
「久左衛門は次第に、犬の
ような天与の鋭い嗅覚に加え
て陶土を捏ねたり轆轤を引く

技術でも非凡な能力を発揮し
た。人並み外れた回復努力が、
脳裏の奥で醸成される直観力
を研ぎ澄ましていく。昔の狸
顔の愛想の良い面相が、鬼の
ような怖い形相で陶土を捏
ね、轆轤を引く。(略) 菊三
郎直伝の半透明感ある青手九
谷の技法を、詳細に検討し改
良して、通常をはるかに超え
た高温で焼く技法に寝食を忘
れて没頭した。(略) 火度が
低いと青色の発色が不十分に
なる。逆に高温だと釉薬が燃

えて発色しない恐れがある。
高火度で艶やかな漣模様の青
色に発色する釉薬の開発は、
久左衛門ならではものだった。
／やがて、多感な久左衛
門には九谷伝統の具象的な山
水・花鳥の文様が古臭く思え
て、画工の領域にも足を踏み
込んだ。釉の流れに変化をつ
けた絵付けにも新境地を開
き、華麗な彩釉磁器は、具象
から抽象の石畳模様や漣模様
に変化し、「耀青磁器」と呼

ばれた。白い磁肌に千変万化
の美を現出させる幻想的な耀
彩は、吉田屋窯伝来の青手九
谷の世界に新風を吹き込ん
だ。」

この秀麗なる描写は、作者
自身が、「白素地の九谷焼は
花板陶石のみで作られてきた
と私は理解していた。古九谷
を脱却せんと伝右衛門(引用
者註)大聖寺藩の豪商で吉田
屋窯の祖・吉田屋伝右衛門)
は精製しない花板陶石に天草
陶石や瀬戸陶石を混ぜること

で青手を作る。それが海外で
評判を呼び、日本での再評価
の発端となった」と「あとが
き」で述べているように、九
谷焼への拍撃なる共感があっ
たからこそできたことだとい

える。
本書における物語の拡張
(背景として横たわる歴史事
象)によって、久左衛門は、
独特の嗅覚が認知され日露戦
争で諜報員となるも、捕虜と
なり、ロシア革命前後結成さ

れ、やがて反ポリシェヴィキ
に転じることになる社会革命
(エスエル)党に洗脳され、
記憶喪失となりながらも、帰
国するという数奇の運命を照
射され、宗次郎に関しては、
文人生活のなかで中村屋創業
者や室生犀星との知遇を得な
がら変転するというように描
出されていくわけだが、物語

の核心は、やはり久左衛門と
妙の関係性にあるとわたしは
思う。

出征し、病気のため一時帰
還し、久左衛門は病室で妙と
十何年ぶりで再会すること
になるのだが、妙を連れてき
た妻・康代をなじる場面は、
やがて妙の面影を残す名品二
作を残しながら九谷焼の名匠
となっていく久左衛門の矜持
を際立たせていくことにな
る。

もちろん本書は、様々な角
度から読み解くことができる
多彩な小説であるのは、いっ
までもない。

(評論家)